

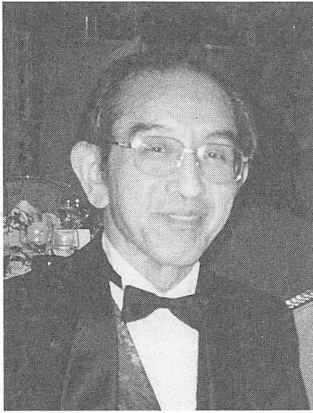
大村 敏郎 先生を悼む

日本医史学会理事 大 滝 紀 雄

“Je le pensay et Dieu le guarit.”この文章は四百年前のフランス古語のため、種々のスペルと訳があるが、ひとまずこのままにしておこう。従来この訳は「われ包帯し、神なおし給う」とされてきた。「パンセ」には「考える」という意味のほか「包帯する」「処置をする」という意味がある。大村先生は「私が処置をし、神がなおし給うた」の過去形を最適とした。杉田玄白の「医事不如自然」と一脈相通するものがある。この言葉は千二百ページの『パレ全集』の数か所に見られるので、パレ自身かなり気に入った言葉であったに違いない。一九八三(昭和五十八)年たまたま私が日本医史学会会長を引き受けた。会長講演が神奈川の医史学についてであったため、神奈川の会員の皆さんには大変お世話になった。中でも大村先生には講演の項目、レイアウトその他について御自分から手伝いたいとの申し出があり、そのおかげで私のつたない文章が素晴らしく立派な文章に様変わりしたことを、現在でも感謝している。

なお一九八三年日本医史学会が横浜で開催されたのが刺激となって『日本医史学会神奈川地方会』が結成された。この設立に当たっても川崎の大村先生に大変お世話になったことを特記しておく。

小学校一年生からフランス語を教えられた暁星を卒業して、医師となった人はこれまで百人以上を数えるが、フランス語を十分利用したり、医史学の研究に応用した人は、古川明先生(医学切手の大研究者)と、大村敏郎先生くらいし



か思い当たらない。大村先生は一九六四年慶應義塾大学医学部を卒業、一九七一年二月フランス政府給費留学生としてパリ大学コシャン・ポールロアイアル外科留学。その後約二十年後の一九九〇年十一月には、パレ没後四百年祭のNHKテレビ取材に同行して、彼は再度フランスを訪れた。最初の留学はフランス外科学を研究するためであったが、彼はそれだけで無く、フランス医史学を詳細に研究するきっかけともなった。彼は川崎市立井田病院総合医療部長、川崎市立高津保健所長、慶應義塾大学医学部客員教授の要職にありながらも、医史学の研究は片時も休まなかった。

大村先生は医療のシンボルの原点が聴診器と注射器であることを考え、まず第一に聴診器の発明者であるラエネットの跡を訪ねた。パリからはるか西、大西洋に飛び出したブルターニュ半島にカンペールがある。ここがラエネットの生地である。第二の注射器のふるさとがブラヴァーズであるため彼はそこを訪れブラヴァーズ第一号注射器を確かめに行った。此処はパリより東南、新幹線TGVのリヨン駅に近いところにある。第三のパレの生まれ故郷であるプール・エルサン村は現在ではその名が見当たらない。分かっているのは、ラヴァルに近しいことだけであった。それもそれは現在ここはラヴァル市に吸収されラヴァル市の一部となっている。ラヴァルはパリからラエネットが生まれたカンペールへ向う途中にある。この三か所を大村先生はつぶさに歩いて回り、実際に確かめられた。『聴診器と注射器のふるさと』一九八八年、考古堂書店発行、に詳述されている。

大村先生はここ数年間腎機能障害を患い、一進一退であり、人工透析などを行ない、一時小康状態を保ったがその効なく、遂に訃音に接するに至った。誠に惜しんでもあまりがある。